

第3章 まとめ

第1節 萩原I・II石器群の編年の位置

本遺跡からは、合計171点の旧石器時代の遺物が出土した。萩原遺跡では、これまで4度にわたって旧石器時代の調査が実施されており、1994年の1次調査（藤谷1995）では23点の旧石器が出土している。2005年実施の2次調査で2点（鹿又ほか2006）、2006年度に実施された3次調査で84点（本報告）、2007年度に実施された4次調査で62点（本報告）の旧石器が出土している。これらを合計した点数が171点である。

出土層位

萩原遺跡は福島県浜通り地方の南相馬市小高区に位置し、西側に阿武隈高地、東に太平洋を臨む。遺跡は阿武隈高地の東縁部から延びる段丘上にあり、海岸線からはおよそ7km離れている。遺跡の北側に小高川支流の鳩原川、南側に大穴川が東に向かって流れている。

萩原遺跡はこれら河川に開折された標高60m程の河岸段丘面上に立地し、旧石器の出土した地点もおおむね平坦である。この段丘面は中位Ⅱ面とされ、下末吉面相当に比定される（久保ほか1990）。実際に遺跡の位置する段丘面の対比を行うためには安達太良岳テフラなどで確認する必要があるが、少なくとも10万年前には離水していたと考えられ、萩原遺跡の立地する段丘面にはそれ以降の火山灰土が形成されていることになる。

萩原遺跡では8ヵ所の石器集中部を確認したが、1～7号石器集中部と8号石器集中部は直線距離にして260m離れている。したがって両地点の出土層準を直接対比できなかったが、基本的にはLⅣである黄褐色ローム層とその上位漸移層であるLⅢの中から旧石器は出土している。各石器集中部によってばらつきはあるが、多くの旧石器はLⅣa中位からLⅣb下位にかけて出土している。

5号石器集中部周辺の土壤を分析したところ、微量のバブル型火山ガラスが検出された。この火山ガラスを蛍光X線分析やEPMA分析で追認したところ、始良Tn火山灰（AT）である可能性が高いとされた。この火山ガラスはLⅢ下部とLⅣ最上層にかけて検出されているが、分析者はテフラ最濃集部の下限であるLⅣ最上部をAT降灰層準に推定している。

また、石器包含層のLⅣが黄褐色土（10YR5/8）であるのに対して、下位のLⅤはややくすんだ黄褐色（10YR5/6）を呈している。逆にそれより下位のLⅥは明黄褐色を呈するローム層であるために、LⅤの「暗色化」は際だっている。したがって、LⅤを暗色帶相当層とする見方ができる。

さらに、4号石器集中部のLⅣから出土した炭化材を放射性炭素年代測定したところ、補正年代値で26,000yrBPという値が得られている（藤谷1995）。

以上のことから、萩原遺跡の旧石器出土層位とAT降灰層準との関係については、AT降灰以前とも考えられなくもないが、やはり「微妙」といわざるを得ない。放射性炭素年代値を加味すれば、

荻原遺跡の石器群はA T降灰と近い時期に形成された可能性が考えられる。また、暗色帶相当層の対比において、本石器群の出土層位はその上位と考えられなくもない。しかしながら、本遺跡のL Vを暗色帶とみなすかについては、視覚的な検討を踏まえ、何らかの分析的根拠が求められる。今後は、暗色帶相当層に含まれる炭化物の放射性炭素年代の分析値を積み重ねる必要があろう。

石器群の認定

荻原遺跡では、8ヵ所の石器集中部が検出された。3～7号石器集中部は近接した位置関係にあり、3号と5号、6号と7号石器集中部間では接合関係が認められる。出土層位もL IV a～bに包括され、石器の垂直分布幅も10cm以内に収まる。このことから3～7号石器集中部については、共時性の高い石器群と認識できる。

一方、1・2号石器集中部は、3～7号石器集中部と15m以上離れた地点にある。両者間に接合関係がなく、時間差がある可能性は否定できない。しかしながら、1・2号石器集中部から出土した石器の中に基部加工のナイフ形石器が含まれる点や、石器の主な出土層位がともにL IV aである点を考慮すると、一つの文化期のなかで捉えることができよう。よって、1～7号石器集中部から出土した遺物（計101点）を、荻原I石器群と認定する。

問題となるのは、8号石器集中部に属する遺物の取り扱いである。8号石器集中部は、3～7号石器集中部より260mも離れた地点に単独で分布している。8号石器集中部の遺物そのものは高い接合率を誇り、きわめて共時性の高い石器群として認識される。しかしながら1～7号石器集中部との間には接合関係が認められない。また、両者は同じL IVを主体に出土しているとはいえ、一つの文化期の所産として捉えるには、石器組成・石材組成等の検討を要する。ここでは8号石器集中部から出土した遺物（計44点）について、荻原II石器群と認定し、以下、議論を進めることとする。

この他に、石器集中部の分布範囲に属さない遺物が計26点ある。これらは縄文時代早期の遺物包含層や表土層、搅乱から出土しており、原位置の議論ができない遺物である。形態などから、荻原I・II石器群とは別の文化期に属する可能性のあるもの（図128-1～4、図129-1）もあるが、本報告では事実記載にとどめ、これらについての議論は今後の課題としたい。

石器組成（表14）

荻原I石器群（1～7号石器集中部）は、ナイフ形石器8点・刃部磨製石斧1点・彫器1点・楔形石器1点・二次加工のある剥片8点・微細剥離のある剥片16点・削片1点・剥片54点・碎片2点・石核9点の計101点からなる。ナイフ形石器8点の内、2点は折れ面での接合資料（図107-1）である。これを1点と数えれば、荻原I石器群のナイフ形石器は実質7点、合計点数はちょうど100点となる。したがって本石器群の製品率^{（註1）}は、11%となる。

7点のナイフ形石器は、いずれも縦長剥片を素材とするもので、打面側を基部とし、その周辺に二次加工を施した「基部加工のナイフ形石器」である。素材剥片の大小や厚みなどの形状、二次加工の方法や部位が異なるが、基部に対して入念な調整を行っている点では共通している。基部加工にとどまらず、図102-2や図113-4（1次調査出土）のように素材の両側縁中位まで加工が及ぶ

ものがある^(註2)。また図102-1の基部は、その形態が逆「ハ」の字状に整形され、腹面にも調整剥離がある。

先端部に部分加工を施している例は4点あり（図102-1、図107-1・2、図113-4）、なかには先端部を尖らせるように対向調整をしている例（図107-1）もある。このように基部加工のナイフ形石器の先端部に部分加工を施す例や、基部形態が逆「ハ」の字状を呈する例は、後期旧石器時代前半期の石器群でも後出的要素（藤原・柳田1991、柳田1995）として考えられている。

ナイフ形石器の長さに着目すると、長さが10cm超の大形のものが3例（図102-1、図107-1・2）、長さ6～8cm前後の中形のものが2例（図102-2、図113-4）、長さ4cm程度の小形のものが1例（図102-5）の3つに分けられる。ナイフ形石器の長さが10cm超のものと6cm前後のものとが存在することについても、前半期の石器群で後出的要素と考えられている。この要素は南関東地方の編年においても、いわゆるVII層段階の石器群の特徴として指摘されている（小菅1991）。

この他、萩原I石器群を特徴づける石器として、刃部磨製石斧（図109-1）がある。粘板岩の扁平礫を素材とし、一端に両刃の刃部を研磨して作り出している。また、両側縁を研磨により平行に整形する点は、本資料の技術的な特徴といえる。刃部磨製石斧は後期旧石器時代前半期の石器群に普遍的に組成され、汎列島的な分布をみせる。石斧は南関東地方の石器群ではIX層段階の特徴とされ、VII層段階での出土例は稀であるという。福島県内の遺跡での出土例は、楢葉町大谷上ノ原遺跡（伊藤ほか2001）、須賀川市乙字ヶ滝遺跡（柳田1996）、玉川村江平遺跡（佐藤2002）、会津若松市 笹山原No.8遺跡（柳田1995）などであり、これらの遺跡は後期旧石器時代前半期に位置付けられる。

萩原I石器群の石器組成を概観したが、後期旧石器時代前半期の石器群に普遍的に組成される「台形様石器」・「米ヶ森型台形石器」を欠いている。しかしながら、その素材となる矩形剥片が一定量出土している点や、これらが微細剥離のある剥片に提供されている点を考慮しなければならないだろう。また、本報告で二次加工のある剥片としたものの中には、端部に調整加工を施したもの（図112-6・図113-2）や剥片の周囲が折り取られているもの（図114-5）がある。これらは後述するIII類の剥片剥離技術とともに、積極的に評価すれば「台形様石器」の一群に加えることも可能であろう。

次に萩原II石器群の石器組成について述べる。萩原II石器群は、ナイフ形石器1点、搔器1点、刃部磨製石斧1点、二次加工のある剥片1点、微細剥離のある剥片10点、剥片16点、碎片13点、台石1点の計44点からなる。本石器群の製品率は9%である。石器組成は、長さが10cmを超える基部加工のナイフ形石器（図117-1）と刃部磨製石斧（図118-1）に特徴づけられる。

ナイフ形石器は基部加工の形態が逆「ハ」の字状に整形されたもので、その整形剥離は入念な急斜度調整をなす。この点において、萩原I石器群の図102-1・図111-1・図113-4のナイフ形石器と形態的特徴が一致している。また、刃部磨製石斧においても、両側縁に面的な研磨加工を施す点など、技術的な共通点がある。したがって萩原I・II石器群は、石器組成と技術形態的な観点から同一文化期の石器群として許容されるであろう。

荻原Ⅱ石器群からは、先細りの縦長剥片を素材とした搔器が出土している。ただ、その刃縁は末端部の部分的な加工にとどまり、東山系石器群に組成される先刃形搔器とは異なる形態である。先刃形搔器はA-T下位の石器群、岩手県大渡Ⅱ遺跡第1文化層（中川ほか1994）や新潟県樽口遺跡A-KH文化層（立木ほか1996）などにも出土例が知られるようになった。このことから、本石器群に搔器が組成する点については、前半期の石器群の最も新しい様相を示すものとして肯定的に捉えておきたい。

以上のように荻原Ⅰ・Ⅱ石器群は、基部加工のナイフ形石器と刃部磨製石斧に代表される石器群である。ナイフ形石器の形態的特徴は、後期旧石器時代前半期の石器群のなかでも後出的要素が強い。荻原Ⅰ・Ⅱ石器群は、かつて藤原・柳田が提唱したDグループ（藤原・柳田1991）、鹿又の編年案（鹿又2006）では3群に属する可能性が指摘できよう。

石材組成（表15）

荻原Ⅰ石器群の石材組成は、珪質頁岩36点、凝灰質頁岩2点、砂質頁岩5点、粘板岩6点、凝灰岩1点、玉髓28点、碧玉2点、瑪瑙2点、石英2点、ガラス質安山岩2点、黒色緻密安山岩7点、デイサイト2点、流紋岩3点、黒曜石3点からなる。重量にして珪質頁岩274.4g、凝灰質頁岩13.6g、砂質頁岩74.4g、粘板岩1432.9g、凝灰岩9.5g、玉髓301.5g、碧玉36.8g、瑪瑙68.4g、石英5.6g、ガラス質安山岩6.3g、黒色緻密安山岩68.8g、デイサイト8.8g、流紋岩7.8g、黒曜石6.7gとなり、14種類と多様性に富んだ石材を使用していることがわかる。このような傾向は生活跡的な遺跡に共通してみられ、例えば同時期の笛山原No.8遺跡では10種類の石材が用いられている。

遺跡周辺で採集することが困難な石材（遠隔地石材）として、珪質頁岩・凝灰質頁岩・黒色緻密安山岩・流紋岩・黒曜石があり、遠隔地石材比率（点数比）は49%である。特に茶褐色を呈する珪質頁岩は、本遺跡の所在する太平洋側からは遠く離れた、山形の最上川流域などの日本海側に原産地が求められるという（秦2003）。凝灰質頁岩は猪苗代町の背炙山周辺で採取可能といわれているが、詳細は不明である（柳田1995）。

黒色緻密安山岩は、茨城県大洗海岸で採取可能な石材と類似しており、太平洋沿岸地域での流通が推察される。流紋岩はいわき地域の旧石器・縄文遺跡では普遍的な石材で、当地域に分布する棚平層に起源が求められるという。黒曜石は福島県内では入手不可能な石材であるが、理化学的分析での原産地特定は今後の課題である。

一方、在地性石材と考えられるものは、砂質頁岩・粘板岩・凝灰岩・玉髓・碧玉・瑪瑙・石英・ガラス質安山岩・デイサイトである。これらの石材は、少なくとも本遺跡周辺の河川で採取可能なもの（砂質頁岩・粘板岩・凝灰岩・石英・ガラス質安山岩・デイサイト）もある。また、玉髓・碧玉・瑪瑙は、現在、周辺の河川から容易に採取はできないが、近隣の縄文時代遺跡には多量に搬入された石材である。このことから、少なくとも相馬地方で入手可能な石材と推察される。

また、ナイフ形石器はすべて珪質頁岩を利用しておらず、当然のことながらその素材となりうる縦長剥片も珪質頁岩製がほとんどである。一方、それ以外の玉髓・黒色緻密安山岩・流紋岩などは、

表14 石器組成

	ナ イ フ 形 石 器 器 器	楔 搔 形 磨 石 器 器 斧	刃 部 形 工 製 石 石 剥 片	二 次 加 工 の 有 る 剥 片	微 細 剥 離 の 有 る 剥 片	削 剝 片	碎 片	石 片	台 核 石	小 計
1号石器集中部	2				2					4
2号石器集中部	1		1		1	5	1			9
3号石器集中部	3			2	4	1	9			19
4号石器集中部				1	1	3	11	3		19
5号石器集中部	1					3	5	1		10
6号石器集中部			1		2	2	9	2	2	18
7号石器集中部	1				3	1	15	2		22
8号石器集中部	1	1		1	1	10	16	13	1	44
合 計	9	1	1	1	2	9	26	1	70	1591145

表15 石材組成

	珪 質 質 質 頁 頁 岩	凝 灰 質 板 灰 頁 岩	砂 質 板 灰 頁 岩	粘 玉 碧 瑪 髓 玉 瑙 英	凝 石 斯 緻 質 密 サ 紋 曜 礫 安 安 山 山 岩	ガ ラ ス 密 サ 紋 曜 礫 安 安 山 山 岩	黒 色 イ 密 サ 紋 曜 礫 安 安 山 山 岩	デ イ ス サ タ イ ト	流 黑 砂 小 計	
1号石器集中部	4									4
2号石器集中部	3	2	1	3						9
3号石器集中部	16				1		1		1	19
4号石器集中部	1	3	3	1	4	2	1	1	1	19
5号石器集中部	4				4			1		10
6号石器集中部	3		1		9			3	1	18
7号石器集中部	5				10	1	2	2	1	22
8号石器集中部	41					1			1	44
合 計	77	2	5	6	1	29	2	2	2	145

【A類】 接合資料 I～IIIに代表される縦長剥片剥離技術である。これらは珪質頁岩の同一母岩と推察され、いずれも8号石器集中部（荻原Ⅱ石器群）から出土している。以下、特徴を列挙する。

- ① 打面が上下両端の2カ所に設定された両設打面の石核である [接合資料I・III]。
 - ② 打面に対する調整は存在する [接合資料I～III]。接合資料IIは調整打面を再生するために剥離した剥片である。しかし接合資料Iを見る限り、打面調整が必ずしも主体的に行われていた訳ではない。むしろ平坦な単剥離面打面から、縦長剥片を剥離したものの方が多い。
 - ③ 典型的な憲兵帽状（シャボー・ド・ジャンダルム）の調整打面が存在し、そこからは調整技術の高さが伺える [接合資料I（図124-3）]。
 - ④ 石核作業面に対しての調整は積極的ではない。打面縁に細かな調整剥離（頭部調整）は行われているが、稜を形成するための調整は看取できない。
 - ⑤ 剥離された縦長剥片は先細りで打瘤付近に最大幅をもつものが多い。このような剥片が選択的にナイフ形石器の素材として提供されていると推察される。
 - ⑥ 接合資料I～IIIで剥離角が計測できた剥片は13点あり、86～112度の範囲に収まり、最頻値は100度前後にある。この剥離角は打面が残るナイフ形石器での計測値（99・100・102度）と一

後述する各種の剥片剥離技術によって生産された矩形剥片に利用されている。

一方、荻原Ⅱ石器群は41点の珪質頁岩に対し、その他の石材は玉髓・ディサイト・砂礫岩の各1点にすぎない。これは接合資料Ⅰ～Ⅲをはじめ、そのほとんどが珪質頁岩の同じ母岩と考えられる資料群であることから、自明のことである。

このように荻原Ⅰ石器群と荻原Ⅱ石器群では石材組成に明確な違いが認められるが、これは石器集中部の性格に起因するものであろう。先にも述べたが荻原Ⅰ石器群の主体である3～7号石器集中部が生活跡的な遺構と推察されるのに対し、荻原Ⅱ石器群（8号石器集中部）は石器製作跡的な遺構の性格が想定される（註3）。

剥片剝離技術

荻原 I・II 石器群では 3 種類の剥片剥離技術が認められた (A～C 類)。

致する傾向にある。

- ⑦ 接合資料 I ~ III に帰属する資料は、剥片の最大幅に対して、打面幅が極端に狭いものが多い。また、打瘤の高まりが発達したものも多い。剥離具などの特徴を示している可能性がある。
- ⑧ 接合資料 I には、縦長剥片を剥離する技術は認められる。しかしながら真正な石刃技法というには程遠く、縦長剥片（石刃）を連續して剥離するには至っていない。

以上のように、本石器群の縦長剥片剥離技術には、各種の石核調整技術が認められる。しかしながらその運用は限定的であり、それを駆使した東山系石器群の石刃技法とは一線を画する。

一方、ナイフ形石器の背面剥離痕はそのほとんどが腹面と同一方向を示すことから、単設打面の石核から剥離された縦長剥片を素材とした可能性が高い。ただし、両設打面から剥離された縦長剥片（図107-3・4）もない訳ではないので、本石器群において単設打面と両設打面の違いは、それほど議論すべき問題でないのかもしれない。

接合資料 I を見る限り、石核が小形化すればするほど、打面転移が頻繁に行われていると推察される。今後、本地域の剥片剥離技術を議論する場合、珪質頁岩の原産地から遠く離れた太平洋沿岸地域での石材貴重性も加味する必要があろう。

【B類】 打面と作業面が固定化せず、頻繁に転移を繰り返しながら剥片剥離を行う技術。

①分割礫の周囲に設けた打面から求心状に剥離を行うものと、②打面と作業面を90度単位で転移して最終的な石核形状がサイコロ状を呈するものが確認された。両者とも長さ・幅が2~3cm大の矩形剥片が生産されている。これらの剥離技術には、碧玉・瑪瑙等の在地性石材がもっぱら用いられ、珪質頁岩は利用されていない。本石器群では4号石器集中部から2点の円盤状石核（図109-5・7）、7号石器集中部から多面体石核（図113-1）とサイコロ状石核（図114-10）が出土している。

【C類】 剥片を石核の素材に用い、その背面もしくは腹面側の縁辺から小形矩形剥片を連續的に剥離する技術。

本石器群では米ヶ森技法のように打点の移動に連続性はない。例えば、図112-7のように打面と作業面が頻繁に転移し、縁辺がショッピングトゥール状を呈するものもある。図111-8のように上下両端から挟みこむように剥片剥離を行った例もある。また、図108-12のように大形剥片の打面側からも剥片剥離を行った例もある。図114-9では数回程度の剥離で石核が廃棄されている。つまり、大形剥片を石核素材として小形矩形剥片を剥離する点では米ヶ森技法との共通要素があるが、打点が規則的に一方向に移動しておらず、連続的な剥片剥離は認められない。

III類の利用石材はII類と同様、玉髓系の石材が多用されている。ただし、図111-8のように珪質頁岩製のものもある。ただ、珪質頁岩製の小形矩形剥片に背面側にポジ面を有する剥片はほとんどなく、その運用は限定されたものだったと推察される。したがって、III類も主に在地性石材が用いられた剥離技術だと考えられる。

米ヶ森技法（藤原1984）や「類米ヶ森技法」（麻柄2005）とよばれる剥片素材石核を用いた小形矩形剥片剥離技術は、日本列島では日本海側に特に色濃く分布することが指摘されている（麻柄

2005)。この剥片剥離技術は「米ヶ森型台形石器」もしくは端部のみに整形加工を施した「台形様石器」の製作と密接に結びついて発展したことは明らかである。東北地方においては後期旧石器時代前半期を通じて、縦長剥片剥離技術と相対する技術基盤であったと考えている。

編年的位置（図153）

萩原I・II石器群は、LIVa～bに包含され、ATの火山ガラスがLIV最上層（LIVa）にピーグが求められるとすると、層位的には微妙ではあるがAT降灰以前に位置づけられる。また、 β 線分析法であるが、放射性炭素年代で26,000yrBPという値が得られていることから、AT降灰と近い時期に形成された可能性が考えられる。萩原I石器群と萩原II石器群は260m離れて検出されているが、基部加工のナイフ形石器や刃部磨製石斧を組成する点やその整形加工に共通するところが多く、同時期の石器群と評価できる。

福島県内の遺跡で、本石器群と最も類似点の多い石器群は、会津若松市 笹山原No.8遺跡（柳田1995）といえよう。基部加工のナイフ形石器を主体とする石器群で、これに台形様石器や米ヶ森型台形石器、刃部磨製石斧が加わる。基部加工のナイフ形石器は基部形態が逆「ハ」の字状に開くものが多く、急斜度の整形加工が施されているものが主体的である。刃部磨製石斧を4点組成している点からも、本石器群と共時性の高い石器群と考えている。また、 笹山原No.8遺跡のナイフ形石器のなかには二側縁加工のものやペン先形に近いものもあり、その形態は本遺跡よりも多様である。また、本遺跡よりも日本海側に近い立地も相まって、米ヶ森型台形石器が出土していることも相違点といえる。

この他、福島県内で、ナイフ形石器の基部形態が逆「ハ」の字状に開くものがまとめて出土している遺跡として、学史上著名な鏡石町成田遺跡がある（鳥畠1956）。ナイフ形石器8点、石刃6点の計14点の採集資料である。いずれも珪質頁岩製で2例の接合資料がある。

これまで 笹山原No.8遺跡や成田遺跡の編年位置づけについては、後期旧石器時代前半期のなかでも最も新しい段階に比定されてきた（柳田2006ほか）。東北地方の編年案は、「後期旧石器時代前半期の調整技術の未発達な石刃技法から後半期の調整技術の発達した石刃技法へ技術基盤が変遷する（藤原1993）」という、藤原妃敏の実証的仮説に基づいている。今日においてもこの視点は、当地方の編年の根幹をなすものと考えている。

しかしながら、本石器群の縦長剥片剥離技術は、各種の石核調整が確認され、なかには憲兵帽状の調整打面を有する縦長剥片も出土している。接合資料I～IIIなどは調整技術を駆使した石刃技法とはいえないものの、ところどころに調整技術が駆使されている点に注目したい。この点をもって東山系石器群との関連を述べるつもりはないが、石刃技法についての従来の認識については福島県内においても再考の余地があるようである。

調整技術の発達した石刃技法を技術基盤とする東山系石器群については、岩手県大渡II遺跡（中川ほか1994）・岩手県峠山牧場II遺跡A地区（高橋ほか1999）や新潟県樽口遺跡（立木ほか1996）において、AT降灰以前の段階にさかのぼることが確認されている。したがって、今回、本石器群で

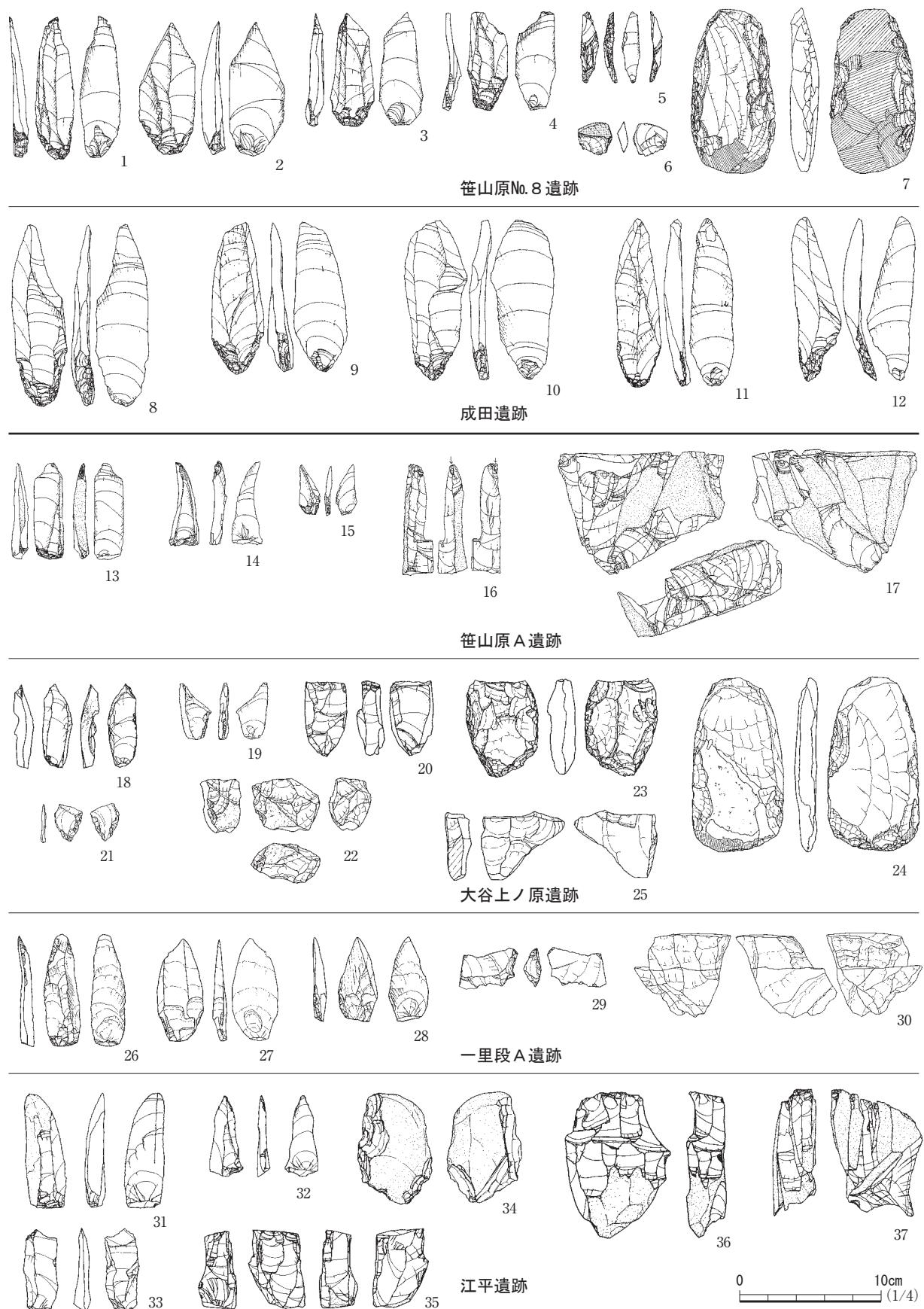


図153 福島県内の後期旧石器時代前半期の石器群

確認された調整技術を有する縦長剥片剥離技術についても、後期旧石器時代前半期に積極的に位置付けておきたい。

一方、本遺跡と同じ福島県の浜通り地方にあって、基部加工のナイフ形石器と刃部磨製石斧を組成する石器群に楢葉町大谷上ノ原遺跡1・2号ブロック（以下、石器集中部）の資料がある（伊藤ほか2001）。近年では1号と2号石器集中部の資料を前半期のなかでも別々の時期に充てる研究（鹿又2006・大場ほか2006）もあるが、筆者は両石器集中部の剥片剥離技術の主体が打面と作業面が90度単位で転移する技術であることから、両者の共時性は高いと判断している。さらに、在地性石材ともいえる流紋岩が1号石器集中部で約66%、2号石器集中部で約70%とほぼ拮抗した割合であることや、流紋岩の原礫に近い状態での搬入形態から残核・廃棄にいたるライフヒストリーが、両石器集中部でよく類似していることなども同一の石器群と考える理由である。

そのことを前提に、大谷上ノ原遺跡1・2号石器集中部の資料を見てみると、ナイフ形石器のいずれも長さが6cm以下と小形の部類に入る。基部に打面を残す点では本石器群と共通しているが、基部形態が逆「ハ」の字に開くものがない点などの違いが認められる。大谷上ノ原遺跡1号石器集中部では基部に細かく二次加工を施すナイフ形石器が出土しており、むしろ笛山原A遺跡の資料と類似している。したがって、かつて柳田俊雄が笛山原A遺跡（Cグループ）から笛山原No.8遺跡（Dグループ）へと変遷を考えたように、筆者も大谷上ノ原遺跡から萩原遺跡への変遷観は妥当ではないかと考えている。また、江平遺跡や一里段A遺跡西部石器集中部の石器群についても、同様の理由から大谷上ノ原遺跡1・2号石器集中部と同時期の所産ではないかと考えている。

以上のことから、萩原I・II石器群については、剥片剥離技術において従来の見解と若干異なるが、後期旧石器時代前半期の最も新しい段階に位置付けておきたい（註4）。

また、本遺跡は珪質頁岩の原産地から離れた東北地方の太平洋沿岸地域に位置している。にもかかわらず、接合資料Iのように石核の状態で遺跡に搬入し、そこで石器製作が行われていたことは極めて重要な発見といえる。本石器群は石材原産地遺跡から離れた消費地遺跡での石器製作の多様性を物語る上でも、貴重な資料となるであろう。今後は、石器群の空間分析が大きな検討課題として残っており、近々に取り組みたいと考えている。

（門脇）

補 註

- 註1 製品率は器種（トゥール）/出土石器の総点数×100とし、器種には二次加工のある剥片や微細剥離のある剥片を含めない。
- 註2 この資料を、二側縁加工のナイフ形石器として捉える研究もあったが、今回の成果を踏まえると、図113-4も基部加工のナイフ形石器の範疇で捉えてよいだろう。
- 註3 このような石器群の性格の違いが石器組成・石材組成に与える影響については、以前より指摘されてきたことである。福島県内でも笛山原A遺跡と笛山原No.8遺跡の報告がなされて以降、様々な議論がなされている。
- 註4 萩原遺跡の1994年度資料の位置付けをめぐって、かつて柳田俊雄は後期旧石器時代前半期のDグループに比定した（阿部・柳田1998）。一方、近年では後期旧石器時代の後半期の尖頭器を伴うグループに比定する研究もあった（鹿又2006）。今回の調査成果により、前者と同様の見解をもつにいたった。